東ドイツにおける「公共性」と「超党派性」
――文化同盟の議論を中心に――

伊豆田俊輔

1　はじめに

二〇二〇年九月、当時の菅義偉首相が日本学術会議の会員候補六人の任命を拒否したことが報じられた。それ以降、（原稿執筆時点の二〇二三年一月まで）日本学術会議と政治の関係は着地点が見えていない。学術会議の新規会員は、会員および連携会員、そして関連する学術団体の推薦によって選出されてきた。学術会議によると、この方法は「科学者が自律した集団として公共的役割を果たす」ためとされる[1]。また、学術会議が政策立案者と意見交換をする際には、「科学的助言活動の党派的中立性」に留意することが前提とされている[2]。同組織は党派的に中立で、公共的な役割を果たしているために、その自律性が担保されてきたといえるだろう。

ところで、この「公共」という概念は歴史的なカテゴリーであり、地域や時代に応じて、その意味するものは変わってきた[3]。そこで本稿では現在の日本の公共性を考える一つの材料として、東ドイツの事例を紹介したい。この地域において公共性と党派性はどのように理解されていたのだろうか。もとより、現代の日本と旧東ドイツにおける学問と政治の関係を同列に扱うことはできない。東ドイツにおいて、学術は政治的に日本よりもはるかに厳しい統制のもとに置かれていたからである。しかしながら、いかなる論理でその統制が正当化されたのか、そしてこの際に学問が公共性や党派性とどのように結びついていたのかを分析することは、現代の日本における政治と学問の関係を考えるための参考材料になるのではないだろうか。

以下、本論ではまず東ドイツの政治と学問が置かれた状況を確認する（2）。次いで戦後間もない時期から一九五〇年代後半にかけて公共性がどのように捉えられてきたのかを、文化同盟という組織の事例から論じる（3、4）。その後、一九五八年に東ドイツの大学で開催された或る討論会の事例から、東ドイツの公共圏の変化について素描する（5）。

2　一九四五～五〇年代までの東ドイツ政治と学問

第二次世界大戦後の東ドイツ地域では、一時的に多元主義的な政治制度が再生したが、次第にそれがドイツ社会主義統一（以下ＳＥＤ）による一党独裁体制に変質していった。一九四五年六月にドイツ共産党（以下ＫＰＤ）が、次いでドイツ社会民主党（以下ＳＰＤ）が再建された。さらに同年六月末にキリスト教民主同盟（以下ＣＤＵ）が、七月に自由民主党（以下ＬＤＰＤ）が結党された。この四政党は―かつてのナチ党や極右政党を排除しながらも―ヴァイマル時代の諸政党とそのスペクトラムをおおよそ再現していた。一九四六年四月には占領軍の支援を受けつつ、ＫＰＤがＳＰＤを強制的に取り込んでＳＥＤが誕生した。一九四八年六月にはＣＤＵとＬＤＰＤの支持基盤を奪うことを目的に、ＳＥＤと占領軍が、ドイツ民主農民党（以下ＤＢＤ）とドイツ国民民主党（以下ＮＤＰＤ）という政党を作らせた。そして一九四九年に建国されたドイツ民主共和国は、国制上は議会を最高機関とし、そこには上述の五政党と多数の社会団体（労働組合や女性団体、文化団体など）が議

席を有していた。これは学問の世界にも影響を及ぼしていた。とりわけ自然科学や医学の分野ではＳＥＤ党員が少なく、[5]ＣＤＵ党員やＬＤＰＤ党員、さらにどの政党にも所属していない研究者も多かった。

東ドイツにおける学問にとって重要な役割を果たした機関としては以下の三つを挙げることができる。まずは大学である。大学は新たなるエリート生産の拠点であるため、哲学や社会科学を中心に党と国家から統制を受けるようになった。ただし、物理や化学や医学などの自然科学分野は簡単に自律性を失わなかった。[6]第二の重要な機関はアカデミーである。その一つのベルリン・ドイツ科学アカデミー（一九七二年以降の「ＤＤＲ科学アカデミー」）は、自然科学や機械工学を中心に多数の研究所を有する総合研究機関であった。ほかにも、現存するドイツ語圏最古の自然科学アカデミー「レオポルディーナ」が東ドイツには存在していた。レオポルディーナは医療・薬学研究で重要な地位を占めており、東ドイツの国家機関ではなく、ドイツ全体の組織として東西交流の機能も有していた。[7]三つ目に民間の結社の存在を挙げることができる。戦後間もない東ドイツでは様々な民間の結社が再建・新設されていた。そしてこれらの中には、研究者同士の交流を促し、学術的な知見を公衆に訴える啓蒙活動をおこなう団体もあった。その一つが「ドイツの民主的刷新のための文化同盟（以下、文化同盟）」という結社である。この組織は一九四五年七月に共産主義者で詩人のヨハネス・Ｒ・ベッヒャーの呼びかけによって作られ、ドイツの芸術家や科学者を糾合した団体となった。[8]

3　一九四五／七年の文化同盟――「超党派性な公共性」

文化同盟が設立されたとき、この結社は超党派の組織とされ、その超党派性は団体の「公共的」性質と結びつけられていた。たとえば四五年七月の設立集会で、発起人の一人で作家のベルンハルト・ケラーマンは、文化同盟が「わたしたちの国の精神的・文化的な議会」になるべきと述べた。[9]ここでいう「議会」とは、ナチズムを排除しながら、それ以外のあらゆる政治的立場が歓迎される場という意味であった。[10]文化同盟は同年八月に会長と理事会員（通常時の意思決定機関の役員）を選出した。ＫＰＤ党員のベッヒャーが会長になり、副会長には政党に属していないケラーマンと画家のカール・ホーファーと古典文献学者ヨハネス・シュトルクスが選ばれた。そして事務を担当する書記長にはＫＰＤの政治家ハインツ・ヴィルマンが就任した。[11]この時期の文化同盟は多種多様な世界観に開かれた場とされた。さらに地域レベルの活動でも文化同盟はＳＥＤやＣＤＵ、ＬＤＰＤ党員や無党派の人々の交流の場になっていた。[12]

ベッヒャーとヴィルマンは複数の政党の存在を歓迎していた。一九四七年に書かれた冊子『文化同盟の二年間』では以下のように書かれている。

> 文化同盟は諸政党に対してどのような関係にあるのか。私たちは強力な諸政党が作られることを、人民による自由な意思決定のはじまりとして歓迎する。創造的人民の諸勢力によって担われる歴史的で強力な諸政党が作られることで、我々の公共の生活〔unser öffentliches Leben〕がはじまる。そして、そうした政治化の過程の中で私たちドイツ人には、国民の生存を脅かす矛盾を、すなわち、意志と現実、内奥と国民としての実存とその国家としての外形の間の矛盾を乗り越える機会が与えられる。[13]

「公共の生活」とは広義の政治という意味で用いられている。そして政党は政治への参加を促すものとして歓迎されていた。そしてここで、ベッヒャーとヴィルマンは常に複数形で「諸政党」と書いていた。特定の一つの党が「公共の生活」を支配することは許されず、むしろ公共的なものは超党派である必要があったからだ。さらに「超党派性」というものは、諸政党の成員だけを指しているのではなく、どの政党にも所属しない人々をも包摂することと理解されていた[14]。この点は以下のように敷衍されている。

> 超党派性とは、しばしば政治的出来事に対する無関心と取り違えられる。しかし私たちの国の重大問題に無関心であることは、私たちにとって有害なままである。ドイツにとって重大な決断が問題である場合、私たちは消極的なままでいることを望まないし、そのようなことはできない[15]。

戦後間もない時期の文化同盟幹部にとって超党派的とは、党派的＝部分的な利害を超えて、現在のドイツ国民がおかれた危急存亡の事態に関心を持つすべての人々に開かれた状態として考えられていた。

ただし、ここで想定されている公共圏にはいくつかの排除も前提とされている。第一はナチズムと軍国主義の全面的な排除である。文化同盟はナチのイデオロギーを「公的生活から粛清し、純粋さを守ること」を基本的な課題に設定していた[16]。そのため旧ナチ党員やSSやSAなどの関係団体に在籍した経歴がある者は、原則として会員になることはできなかった。第二に、女性の存在が挙げられる。一九四五年八月に選ばれた二七人の理事の中で、女性は彫刻家のレネ・ジンテニスのみであった[17]。また七月の設立集会でも女性の登壇者は見つけられなかった。しかしながら、文化同盟は全体としては多数の女性会員を有し、地域別に作られたグループでは男女の会員数が同数近かった[18]。それゆえ文化同盟において女性は過少代表の状態であったといえる。第三に指摘するべきは社会階層による排除である。文化同盟は知識人を代表する組織として誕生した。そのため文化同盟の理事に労働者や農民は含まれていなかった。さらに、地域のレベルでは絵画展やコンサート、研究者の講演などが行われていたものの、その参加者は主として、書籍を読み音楽などの文化を消費する都市の市民であった[19]といってよい。すなわち、文化同盟は主として都市の公衆からなる超党派の公共圏を形成していたのである。

4　一九五七／八年の文化同盟の組織改革

文化同盟の超党派的な理念は一九五六年を機に変化を余儀なくされる。この年の秋、文化同盟のメンバーであった哲学者のヴォルフガング・ハーリヒやアウフバウ出版社社長のヴァルター・ヤンカ、さらに文化同盟の機関紙『ゾンターク』紙の編集部員たちが検挙されたからである。SED指導部やシュタージから「修正主義」知識人の温床とみなされた文化同盟は、組織の名称と基本理念を一部変えることで、この危機を逃れようとしていた。

一九五七年九月一三日の理事会で、書記長のカール＝ハインツ・シュールマイスター（SED）は、文化同盟会員たちが国家に敵対する行為をしてしまったのは、「中立という雰囲気」や「イデオロギー的な共存」を許してしまったからだと分析した[20]。こうした反省から、今後の文化同

盟は社会主義に対して明確な態度を取るべきだとして、こう述べた。

この新しい〔文化同盟の―引用者〕方針は、文化同盟の超党派性をあきらめることになるのでしょうか。こうした問いに私たちはつねにこう答えるべきでしょう。文化同盟は超党派的な組織であり、今後もそうあり続ける。しかし、つねに社会主義という大義の味方であると〔für die Sache des Sozialismus Partei ergreifen〕。[21]

こうした傾向は、文化同盟の名称変更に関する議論からもうかがうことができる。一九五八年二月に「ドイツの民主的刷新のための文化同盟」は「ドイツ文化同盟」に改称した。その理由は、「民主的刷新」という標語が現在の東ドイツでは誤解を招きかねないというものだった。理事の一人であるエーリヒ・ヴェント（ＳＥＤ）は、五七年一〇月三日の理事会でこの点に触れた。

もし民主的刷新という言葉に固執したら、この名前は本当に誤解を招きかねません。いったい我が国でなにを民主的に刷新するべきなのでしょうか。かつて少々広まっていた民主主義の理解に基づいて、つまり、複数政党制等々を備えたブルジョア的な民主主義の理解に基づいて民主的な刷新を目指そう、と主張する人々がいるだろうと十分に想像できます。[22]

ここで複数政党制は誤解として退けられている。文化同盟は、ＳＥＤやＬＤＰＤやＣＤＵ党員、さらに党に所属していない人が活動する場ではあるが、複数の世界観が競合することは明示的に否定されるようになった。

第二に、これまでの組織の閉鎖性が問題視されるようになった。たとえば五七年九月三日に行われた文化同盟内のＳＥＤ党員たちの会合において、物理化学者のローベルト・ハーヴェマンは、文化同盟が急進的な社会主義路線について行けない人のための「保冷庫」のようになっていると指摘した。[23] さらにシュールマイスターは先述の九月一三日の理事会で、文化同盟は知識人だけの閉鎖的な組織であることをやめ、文化に関心をもつ勤労者たちと知識人の団体として自らを定義するべきだとした。[24] そして翌五八年に開催される第五回文化同盟大会（最高意思決定機関）への期待をこう表明した。

第五回同盟大会が、会員から、そして世論〔Öffentlichkeit〕からも大きな関心が寄せられることは、非常に喜ばしいことです。〔…〕すべての勤労者、とりわけ我々の共和国の指導的な勢力である労働者階級と緊密に結びつき、ドイツ最初の社会主義国家をさらに強靭で堅固にする仕事にとりかかりましょう！[25]

こうして文化同盟の幹部たちは、都市の市民からなる公共圏だけではなく、その外延の労働者や農民を含めた勤労者の世界まで広がる公共圏を意識するようになっていた。

上述の変化は五八年二月に定められた新しい基本方針と理事の構成からもうかがうことができる。文化同盟は党の所属や宗派から独立して、東ドイツにおける知識人と文化に関心を持つすべての人をまとめ、その際に「我が国の指導的な勢力である労働者階級と勤労農民と密接に同盟し、社会主義の建設のために働く」ことが謳われるようになった。[26] 新し

く選ばれた理事八七人の中には東ドイツの五政党すべての党員が含まれている。しかし、SED党員が人数で他党を圧倒するようになった[27]。また教会関係者は一人も含まれなくなった。そして今まで会員の少なかった農村部での新規会員獲得が目標に掲げられるようになる[28]。また、基本課題のなかで「ナチ」、「NSDAP」のイデオロギーの排除という文言はなくなっていた。そして新しい理事には旧ナチ党員が（少なくとも）八人含まれるようになった[29]。加えて、新しい理事には九人の女性が選ばれた[30]。この時期の文化同盟においては、参加の機会の拡大が、社会主義的な党派性の貫徹と同時に進んでいたのである。

5　一九五八年の討論会――「党派的な公共性」へ

一九五八年四月十二日と二十一日、ハレ大学において「社会主義的意識形成」というテーマで討論会が開催された[31]。ここにはSEDの指導者ヴァルター・ウルブリヒトとハレ大学・レオポルディーナ関係者の計八〇〇人が参加した。主催は文化同盟ハレ県指導部と文化同盟のハレ大学・知識人クラブであり、集会は二日間、計一〇時間にわたっておこなわれた[32]。司会で文化同盟の幹部のゲルトルート・ザッセ（LDPD）とウルブリヒトを除いて二〇人が登壇している。この二〇人のうち、SED党員が七人、LDPD党員が一人、どの党にも所属していない者四人が確認できた（その他の八人の所属政党は不明）。一八人が男性で、女性登壇者は司会を含めて四人だった。登壇者の多くは博士号ないし教授資格を有しており、労働者はハレ近郊の化学工場「ヴァルター・ウルブリヒト・ロイナ工場」から参加したマリアンネ・ヴェルナーの一人であった。さらに教授陣には旧ナチ党員四人（SAへの加入履歴を見ると五人）が含まれていた[33]。

この会議では、アカデミズムに残る旧来のブルジョア的エリートが糾弾され、ハレ大学の社会主義的な改造が正当化された。テーマは西側との関係、西に逃亡した学生・研究者の学位取り消し問題、学内の保守的な結社の存在など多岐に及んだ。集会全体の経過としては、第一にウルブリヒトが現状の問題点と改善の方向を提示し、これに対しハレ大学教授でレオポルディーナ会長でもあった薬学者のモーテスが、次いで二日目には、レオポルディーナの会員で医学部教授のエアヴィン・ライヒェンバッハが改革に反対する立場から発言をした。その後、それ以外の登壇者がモーテスたちを批判し、最後にウルブリヒトが閉会の演説をしている。

会議初日の開会演説の中で、ウルブリヒトは大学教員が唯物論的弁証法を身に着ける必要性を訴えた。ただし彼は特定の考えを教授たちに押し付けるつもりはなく、自由で「開かれた」討論を通じてマルクス主義が広められるべきだと繰り返した[34]。そしてこの「開かれた」討論は、大学教員や学生だけではなく、男女の労働者たちや農民や手工業者とともに行われるべきだとした[35]。こうしてウルブリヒトは労働者階級の政党であるSEDが外部から大学に関係者を送り込み、学内行政に介入することを正当化した。

対してモーテスは大学が置かれている窮状を訴え、外部からの干渉を否定的に論じた。

> しかし、私たちの大学と研究機関では不毛で不穏なことが起きていて、常に忙しい状態です。数時間一つのことを考え続けることもできないのは、絶えず電話が鳴り続け、新しい催しがあるから

だけではありません。私たち科学者の中で、内心激昂する状態がここ数か月続いているからです。この状況のせいで何か創造的なことを考えるのが不可能になっているのです。〔…〕

大学ではある特定の不穏な状態が広まっていて、私はこれを不毛な不穏さと呼んでいます。これは、本質的には、学術にまったく関係のない男たちによって引き起こされています。私たちの大学では、一度たりとも学問に従事したことがない、これからも関係ないだろう男たちによって物事が決められ、彼らが私たちに絶え間なく容喙してくるのです。[36]

一九五六年以降、東ドイツ各地の大学では「修正主義」に対する取締が強まり、同時に西側への亡命者が増えていた。これに対処するために、大学教員は政治的なキャンペーンに動員され続け、さらに党幹部の介入によって精神の平穏を奪われているという。加えてモーテスは思想的な圧力に触れ、「大学に他の人たちと違う人が少しくらいいても、それを幸せに思ってください（笑）〔…〕私たちはいま、あらゆるものを均そうとしているのです」と訴えた。[37]

モーテスに対して他の登壇者たちから批判が相次いだ。たとえば犯罪学者のヨーン・レクシャス（SED）は、そもそも学部が国家に対して自律しているという前提が間違っているとした。[38]彼は、大学の「学部はそれ自体が国家の一部であり、国家の立てた原則に従わねばならない」と断じた。[39]そして初日の最後の演説でウルブリヒトは、複数の異なった観点を持つことは、学術の仕事を妨げるだろうと述べた。[40]つまり、唯物論的世界観とブルジョア的世界観の併存は弊害を招くという。ただし、同時にこの観点の違いという問題は「率直に〔＝開かれた形で〕話すことで解決しなければいけないとも繰り返した。[41]

四月二一日には二回目の集会が開催された。この日の二人目の登壇者であるライヒェンバッハは、モーテスを援護した。曰く、モーテスの言ったことは医師たちにも当てはまる。東ドイツの医学部教員たちはそもそも過労状態にある。一二時間から一六時間が患者に当てられる。研究ができるのはようやく夜になってからとなる。しかも、ここに政治的な動員がかかる。「私たちは次から次へと集会に出るように急き立てられています。〔…〕こうした話し合いの九〇％で良いことはありません。完全に非建設的です」と不満を述べた。[42]

こうした批判に対して、二日目には複数の登壇者が旧来のアカデミズムの弊害を語った。たとえば、神学部付属の美術史・考古学の研究機関で研究者を志していたイングリット・シュルツェは、昨年に研究所を辞めねばならなかったという。シュルツェによると、労働者の家庭に生まれた女性として、彼女が神学部で学び続けることは困難が多かった。[43]神学部はいまだに「国家内の一種の国家」であり、教授たちには身分的な特権意識が残り、東ドイツ国家の正統性を認めないこともしばしばだったからである。[44]そして彼女はとりわけ神学部教授のクルト・アーラントから政治的な理由で迫害を受けたと告発した。なお、このときシュルツェはシュタージのIM（非公式協力者）として働いており、この告発は東ドイツ国家に従順ではないアーラントの追い落とし工作の一環でもあった。[45]彼女曰く、保守的な教授であるアーラントはシュルツェの左派的な考えを矯正すべく指導したが、彼女はそれを拒否した。するとアーラントは「赤か黒かを選びなさい」と立場を表明するように迫ったという。[46]彼女はSED党員ではなかったが、「赤」と答えた。そこから彼女に対するボイコットが始められ、彼女は孤立し、職場を辞めざるを得な

くなったと主張した。[47] 彼女の告発はモーテスやライヒェンバッハへの直接的な反論ではなかったが、旧来のエリートの求める大学の自律性に疑問を投げかけるものになった。

これ以外にも、学内に前時代から残る組織が批判された。たとえば医学部生のドロテア・ヴンダーは、キリスト教系学生団体が「悪意を持って」学生の軍事教練に反対し、大学の社会主義的な教育を妨害していると訴えた。[48] さらにマルクス研究者のヴォルフガング・ヤーンは、ハレ大学内にある学者たちの結社「スピリトゥス会」が進歩的な大学教授の招聘を妨害してきたとした。[49] 彼によると、「スピリトゥス会」は見ることも感じることもできないのに、大学政策に隠然たる影響力をふるっているという。[50] このような組織は存在自体が非合法であり、大学の方針はすべて教員・党（＝ＳＥＤ）組織・大衆組織の「率直な〔＝開かれた〕議論」のなかで解決することができるはずだとした。[51] さらに歴史家のティルマンは、大学の歴史学研究に残るブルジョア的な歴史観と唯物論的歴史観の対立を恐れるべきではないとしてこう述べた。

〔ブルジョア的な歴史観との―引用者〕対決をしてこなかったのは、第一に私たちの怠慢でしょう。こうしたことを実行すること、あらゆる形ではじめること、対話ないし対決を、開かれた形で、そして党派的に行うことが必要不可欠です。[52]

誰に対しても開かれていることと党派的であることは両立するものとされた。かつての超党派的な公共性は、党派的な公共性に変わりつつあった。

この集会は、文化同盟の公共性の変化を反映したものだった。第一に、一つの党派性があらゆる人に求められるようになった。ここでいう党派性とは、必ずしもＳＥＤへの所属のことではない。党派的な人物とは、唯物論的な歴史観を備えた人のことである。そしてこの前提として、「率直な〔＝開かれた〕議論」を通じて、一つの正しい認識にたどり着けるとされている。それゆえこの時、公共圏とは複数の「正しさ」が存在する、妥協や交渉の場ではなく、正しい党派性を身につけさせるために誰にでも開かれた場になった。

第二に、参加者が社会的な意味で多様になった。集会は大学とアカデミー関係者を中心に行われたが、そこには少数派ながら労働者が、あるいは女子学生や女性研究者が含まれていた。さらに、この場においては（主として守旧派として批判される側ではあったが）旧ナチ党員・ＳＡ隊員にも発言の機会が与えられていた。戦後間もない時期の文化同盟が排除していた人々が、公共の討論の場に組み込まれるようになっていたと言える。

第三に、国家機構による言論への介入が行われていたことも見逃すことはできない。シュタージは集会を利用し、政治的な反対派であるアーラントやスピリトゥス会、キリスト教学生団体を弾圧するようになった。ただし、守旧派に位置づけられたモーテスやライヒェンバッハは遮られることなく自分の意見を最後まで直截にウルブリヒトに伝えることができた。シュタージやＳＥＤは完全に議論を管理できていたわけではなかった。しかし他方で、集会の翌日、四月二二日にはスピリトゥス会の解散命令が出され、[53] 七月にはアーラントが大学を解雇された。[54] この集会からは、参加の裾野を拡大させるという「民主的」な側面と、党派的な敵の排除や反多元主義的な抑圧という、東ドイツの公共性が持っていた両義的な性格を見ることができる。

6　むすびに代えて

東ドイツにおいて公共圏とは当初、多元主義的な場として想定されていた。文化同盟は諸政党の党員や無党派の人々を集めた「超党派的な公共圏」を作り出していた。しかし一九五七年以降、あらゆる人々に「開かれた」場とは、「率直な」討論を通じて、唯物論的な世界観をあらゆる人々に伝達する党派的な場に変わっていった。東ドイツ国家は、かつての都市の教養市民からなる公共圏を、その外部に排除されていた人々の参加という「民主的」な要求を掲げて、新たな公共圏に変容させようとしていた。それは、ＳＥＤの指導的役割によって管理された、全住民を含みこむ党派的な公共圏である。

しかし、５の討論会の例が示すように、一九五〇年代末の東ドイツでも学問の自律性は完全には失われたわけではない。ただしこのとき、大学の自律性とは閉鎖的な旧来の特権だと理解されるようになった。そしてモーテスやライヒェンバッハの主張も、アカデミアの外側からの介入によって、それまでのように研究時間が捻出できなくなり、研究活動の効率が落ちるという批判にとどまった。つまり、ウルブリヒトへの反対者は、学問の公的な役割を盾にしてその自律性を守ることはできなかったといえる。この時期の東ドイツにおいては公共性と党派性とが結合していたため、研究者たちが「公共的な役割を果たすために党派と距離を取る」ことは不可能になっていたからである。五八年四月の集会は、学問の自律性が失われるのに先んじて、党派から距離を置いた学問から公共性が失われたことを象徴するものだった。

それまで超党派性を保ち、公共的な役割を果たしてきた団体の自律性が失われるということは、公共圏が特定の党派によって簒奪され、党派的に再編成される転換点でもあったのである。

注

（1）日本学術会議「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて」（二〇二一年、四月二二日）（http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/sokai/pdf25/sokai182-s-houkoku.pdf）最終アクセス二〇二三年一月一五日

（2）同前。

（3）公共性を考えるための基礎的な文献としては、ユルゲン・ハーバーマス『第二版 公共性の構造転換――市民社会の一カテゴリーについての探求』細谷貞雄／山田正行訳、（未來社、一九九四年）を参照。ハーバーマスが叙述を避けた二〇世紀前半のファシズム体制における公共性の研究として、佐藤卓己『ファシスト的公共性――総力戦体制のメディア論』（岩波書店、二〇一八年）を参照。また日本や東アジアの「公」の概念を辿ったものとしては、東島誠『公共圏の歴史的創造――江湖の思想へ』（東京大学出版会、二〇〇〇年）；三品英憲「八、国家統合と地域社会」、歴史学研究会編『第四次 現代歴史学の成果と課題一・二、世界史像の再認識』（績文堂、二〇一五年）、一九四―二一二頁が有益。また社会主義圏の公共性を考えるうえでは、池田嘉郎「ソヴィエト・ロシア国制史家――石井規衛」、池田嘉朗／草野佳矢子編『国制史は躍動する――ヨーロッパとロシアの対話』（刀水書房、二〇一五年）二五―五八頁が参考になる。東ドイツにおける公共圏の研究としては、たとえば同国におけるスポーツ文化と公共圏を論じた Jan Kleinmanns, *Seltsam unverbunden. Breitensport in der DDR als öffentliche Sphäre zwischen System und Lebenswelt*, Frankfurt am Main / New York 2020 が挙げられる。

（4）本稿では公共圏・公共性〔Öffentlichkeit〕を、「誰に対しても開かれた場（公共圏）」、あるいは「誰に対しても開かれた関係性（公共性）」として論じる。

（5）Vgl. Ralph Jessen, „Vom Ordinarius zum sozialistischen Professor. Die Neukonstruktion des Hochschullehrerberufs in der SBZ/DDR, 1945-1969“, in: Richard Bessel / Ralph Jessen (Hrsg.), *Die Grenzen der Diktatur. Staat und Gesellschaft in der DDR*, Göttingen 1996, S.76-107.

（6）Vgl. Ebd.

（7）東ドイツ時代のレオポルディーナについては以下の文献を参照。Sybille Gerstengarbe / Jens Tiel / Rüdiger vom Bruch (Hrsg.), *Die Leopoldina. Die Deutsche Akademie der Naturforscher zwischen Kaiserreich und früher DDR*, Berlin 2016; Kristie Macratis, „The Unity of Science vs. the Division of Germany: The Leopoldina“, in: Kristie Macrakis / Dieter Hoffmann(eds.), *Science under Socialism. East Germany in Comparative Perspective*, Cambridge / Massachusetts / London 1996, pp.158-179.

（8）会員には芸術家や作家や研究者だけでなく、政治家や事務職員、主婦や医師、技術者などが含まれ、文化同盟は教養市民層の文化的な交流のための大衆組織でもあった。設立時の会員数は一一六人であったが、一九五〇年には一九万四七三四人となっている。会員数と会員の社会的構成については、Vgl. Gerd Dietrich, „Kulturbund“, in: Gerd-Rüdiger Stephan et al. (Hrsg.), *Die Parteien und Organisationen der DDR: ein Handbuch*, Berlin 2002, S.530-559, hier S.559.

（9）Bernhard Kellermann et al., *Manifest und Ansprachen*, Berlin 1945, S.10.

（10）Ebd., S.11.

（11）理事会は二十七人で構成された。会長と三人の副会長に加えて以下の人物が理事になった。ＫＰＤからは政治家のアントン・アッカーマンとオットー・ヴィンツァーとハンス・マーレが、ＳＰＤからは政治家のグスタフ・ダーレンドルフ、ＣＤＵからは（のちに西ベルリン市の副市長になる）政治家のフェルディナント・フリーデンスブルクとエルンスト・レンマーが理事に選出されている。プロテスタント教会からは牧師のオットー・ディルシュナイダーと神学者のフリードリヒ・ヴィルヘルム・クルムマッハーが、カトリック教会からは神父メルヒヨア・グロセクが理事に選ばれた。Vgl. Dietrich, „Kulturbund“, S.533; Magdalena Heider, „Kulturbund zur demokratischen Erneuerung Deutschlands“, in: Martin Broszat / Hermann Weber (Hrsg.), *SBZ-Handbuch*, München 1990, S.714-S.733, hier S.727.

（12）たとえば、史料が残っている一九四七年の（当時のメクレンブルク州の）シュトラールズントの支部を見てみると、会員は全体で一四五九人おり、そのうちＳＥＤ党員は二五八人、ＣＤＵ党員は二五人、ＬＤＰＤ党員は七六人で、最も多いのは政党に入っていない人たち（一一〇〇人）であった。州の人民教育省に送られた文化同盟の月次報告書を参照 „Betrifft: Kulturbund zur demokratischen Erneuerung Deutschlands gemäß Rundschreiben Nr. 50/47 vom 8. März 1947“, in: 6.11-21, Nr. 3176 (Ministerium für Volksbildung), Landeshauptarchiv Schwerin. Ohne Bl.

（13）Heinz Willmann, *Zwei Jahre Kulturbund*, Berlin 1947, S.12.

（14）Vgl. Ebd., S.13, 19.

（15）Ebd., S.22.

（16）Ebd., S.26

（17）Vgl. Dietrich, „Kulturbund“, S.533.; Heider, „Kulturbund“, S.727.

(18) たとえば註一二のシュトラールズントの支部では、男性会員は七一三人で、女性会員は七四六人だった。Vgl. 6.11-21, Nr. 3176.

(19) 文化同盟全体の社会的構成にかんする統計が最初に確認できる一九五〇年には、知識人〔Intelligenz〕が二五・五％、事務職員二一・〇％、生徒ならび学生一二・四％、労働者一一・七％、農民一・五％となっている。Vgl. Dietrich, „Kulturbund", S.559. また、註一二のシュトラールズントの地域グループで最も多いのは（見習いを含めた）事務職員で三七二人、次に多いのが教員で二〇二人、三番目に多いのが学生・生徒で一八八人、四番目に主婦で一五八人を数えた。さらに以下、商人が一〇一人、造形芸術家が七七人、手工業者五九人、医師四六人、労働者三八人となる。また農民は九人であった。シュトラールズント支部全体に占める労働者と農民の割合は、それぞれおよそ二・六％、〇・六％となる。Vgl. 6.11-21, Nr. 3176.

(20) Bundesarchiv Berlin, Stiftung der Parteien und Massenorganisationen der DDR (= BArch., SAPMO), DY27 923, „Stenografisches Protokoll der Sitzung des Präsidialrates des Kulturbundes. Freitag dem 13.9.1957", Bl.16.

(21) Ebd., Bl.18. この発言は機関紙でも確認できる。„Ein Wendepunkt. Aus der Rede der Ersten Sekretär des Kulturbundes Karl-Heinz Schulmeister, vor dem Präsidialrat"in: *Sonntag*, Heft 38, am 22. 9 1956.

(22) BArch., SAPMO, DY 27 985, „Präsidialausschuss Sitzung des Kulturbundes, am Donnerstag, dem 3. Oktober 1957", Bl.127.

(23) Magdalena Heider / Kerstin Thöns (Hrsg.), *SED und Intellektuelle in der DDR der fünfziger Jahre. Kulturbund-Protokolle*, Köln 1991, S.61.

(24) Ebd., S.120.

(25) Ebd., この Öffentlichkeit は新聞雑誌等の「メディア」とも解せるが、シュールマイスターの発言では、その読み手までが想定されているため、世論と訳している。

(26) „Grundaufgaben der Deutschen Kulturbund" in: *Sonntag*, Heft 7 am 16. Februar 1958

(27) 理事の中には党籍が不明の者も多かった。そのためあくまで暫定的な数字であるが、ＳＥＤ党員が三三人、ＬＤＰＤとＣＤＵ党員がそれぞれ二人、ＤＢＤ党員が一人、ＮＤＰＤ党員の理事が三人確認できた。Vgl. Ebd.

(28) Ebd., たとえば集団農場の農民フリーデル・ヒンメルライヒやＤＢＤの幹部ベルトルト・ローゼが加わった。Vgl. „Der neue Präsidialrat", in: Ebd. ただし、文化同盟の構成員の変化は限られたものだった。組織全体における労働者と農民の比率は、一九五五年の時点でそれぞれ一二・六％と〇・九％、一九六〇年で一五・四％と一・七％、一九六五年で一六・四％と一・四％だった。Vgl. Dietrich, „Kulturbund", S.559.

(29) Vgl. „Grundaufgaben der Deutschen Kulturbund". 第五回同盟大会で理事に選出された八七人のうち以下八人はナチ党に加入していたことが確かめられた。副会長で物理学者のエルンスト＝ヨアヒム・ギースマン（一九三七年から党員）、動物学者のダーテ・ハインリヒ（一九三二年からの党員）、古代史家のヴェルナー・ハルトケ（一九三七年からの党員）、ゲルマニストのエドガー・キルシュ（一九三七年からの党員）、軍事学者アルフレート・クラウゼ（一九四〇年からの党員）、農学者のルドルフ・シック（一九三九年からの党員）、厚生大臣のレオポルト・シュタイドレ（一九三三年からの党員）、化学者のペーター＝アドルフ・ティーゼン（一九二二年からの党員）。クラウゼとシックはロストック大学ＨＰで経歴を参照し（https://cpr.uni-rostock.de/

resolve/id/cpr_person_00002955 ; https://cpr.uni-rostock.de/resolve/id/cpr_person_00002034（最終アクセス二〇二三年一月二九日）)。またキルシュの履歴はハレ大学文書館の史料を参照した。Vgl. „Personalbogen“ am 18. 8 1951, PA.27539, „Doz. Dr. Edgar Kirsch“ in Universitätsarchiv Halle. Ohne Bl. これ以外は人名事典（*Wer war wer in der DDR. Ein Lexikon ostdeutscher Biographien*, Band 1 A-L/ Band 2 M-Z, hrsg. von Müller-Enbergs, Helmut et al., Berlin 2010）を参照している。

（30）Vgl. „Der neue Präsidialrat“. 女性理事の占める比率は約一〇%となった。

（31）この会合のプロトコルは、マクデブルクのザクセン＝アンハルト州文書館にタイプ用紙一七八枚の史料として収蔵されている。P.516, Nr.5412, „Protokoll des Gesprächs mit Walter Ulbricht im Kulturbund zu Fragen sozialistischen Bewusstseinsbildung“, in: Landesarchiv Sachsen-Anhalt, Abteilung Magdeburg. 登壇者のファースト・ネームはしばしばプロトコル上では省略されていたが、発言内容や肩書を参考にしつつ、人名事典とハレ大学文書館のＨＰ（https://www.catalogus-professorum-halensis.de/index1945.html（最終アクセス二〇二三年一月二九日））を利用して補った。ファースト・ネームが不明の人物は姓のみを示した。

（32）Ulbricht„Die Perspektive: der Sozialismus“ in: *Sonntag*, Heft 17, am 27. 4 1958.

（33）薬学者のクルト・モーテス（一九三三年からナチ党員、同年にＳＡに加入）、医学者のエアヴィン・ライヒェンバッハ（一九三三年からのナチ党員、同年にＳＡに加入）、スポーツ科学者のゲアハルト・ルーカス（一九三七年からのナチ党員）、生物化学者のホルスト・ハーンゾン（一九三三年からＳＡ、一九三七年からナチ党員）。このほかに地理学・古生物学者のハンス・ガルヴィッツが一九三三年から三四年にＳＡに在籍していた。以上の経歴はすべて註二九のハレ大学文書館のＨＰを参照した。

（34）Vgl. P.516, Nr.5412, „Protokoll des Gesprächs mit Walter Ulbricht“, Bl.26.

（35）Vgl. Ebd., Bl.28.

（36）Ebd., Bl.30-31.

（37）Ebd., Bl.36.

（38）Ebd., Bl.48. レクシャスは労農学部からハレ大学に入学した研究者で、一九四七年からＳＥＤ党員であった。

（39）Ebd., Bl.48.

（40）Vgl., Ebd., Bl.89.

（41）Vgl., Ebd., Bl.97.

（42）Ebd., Bl.108-109.

（43）Ebd., Bl.113.

（44）Ebd., Bl.114-115.

（45）シュルツェがＩＭであったことについては、ハレ大学文書館ＨＰのアーラントにかんする項目を参照した。https://www.catalogus-professorum-halensis.de/alandkurt.html（二〇二三年一月二六日最終アクセス）

（46）P.516, Nr.5412, „Protokoll des Gesprächs mit Walter Ulbricht“, Bl.118-9.

（47）Ebd., Bl.119.

（48）Ebd., Bl.123.

（49）Ebd., Bl.135-136. シュルツェによって糾弾されたアーラントもこの会員であった。「スピリトゥス会」については以下を参照。Vgl. Günter Mühlpfordt / Günter Schenk, *Der Spirituskreis (1890-1958). Eine Gesellschaft in neuhumanistischer Tradition. Vom Kaiserreich bis zum Verbot durch Ulbricht im Rahmen der Verfolgungen an der Universität Halle 1957 und 1958*, Band 2: 1945-1958, Halle 2004; Günter Schenk / Regina Meyer, *Auch*

das war die DDR! Zum Verbot Wissenschaftlergemeinschaft „Sprituskreis“ vor 50 Jahren zur Resivionismusbekämpfung 1958, Halle 2007.

（50） P.516, Nr.5412, „Protokoll des Gesprächs mit Walter Ulbricht“, Bl.135-136.

（51） Ebd., Bl.137.

（52） Ebd., Bl.149.

（53） Vgl. Mühlpfordt / Schenk, *Der Sprituskreis (1890-1958)*, S.512.

（54） 註四五のハレ大学文書館ＨＰのアーラントにかんする項目を参照。

【付記】

本稿の基になったのは、第四四回ドイツ現代史学会（二〇二一年九月一八日）のシンポジウム発表である。しかし、その後行ったシュヴェリーンとマクデブルクとハレでの資料調査の結果を利用し、加筆・修正を行っている。

※本研究は二〇二二年度獨協大学学外研修員（派遣）制度による成果の一部である。

（いずた　しゅんすけ・獨協大学准教授）